In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	(第 9 章)インバウンドツーリズムがもたらした西成区太子地域への効果と周辺商店街の現状の分析 ： 商店街通行人調査を軸に
Author	武田 直之, 杉浦 正彦
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 21 巻, p.185-208.
Published	2020-03-15
ISBN	978-4-904010-36-5
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	「ジェントリフィケーション」を超えて ： 日本・ドイツの都市住宅市場からみた地域の賦活とイノベーション
DOI	10.24544/ocu.20200622-015

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第９章

インバウンドツーリズムがもたらした西成区太子地域への効果と周辺商店街の現状の分析

―商店街通行人調査を軸に―

武田 直之、杉浦 正彦

１．調査に至った背景

1-1　西成区側の動き

大阪市西成区北東端にある太子地域は、西の通称釜ヶ崎と呼ばれる萩之茶屋地域と並び、簡易宿所をはじめとした宿泊施設の集積地域である。そのユニークな地域形成の歴史については、『新今宮駅周辺の歴史・地理探訪―「萩まちだより」特集号合冊版―』（萩之茶屋周辺地域まちづくり合同会社、2019 年）を見ていただきたい。本稿のスタートは 21 世紀を迎えた 2000 年から始まる。

その 2000 年以降、日本経済の不振により、従来の顧客であった日雇労働者の宿泊が減少したため、簡易宿所事業者は新たな顧客の獲得を模索し始めた。丁度 2000 年頃より、一部の簡易宿所事業者はインターネットを活用し、日本人向けの集客を目的としたホームページを開設した。ところが、開設以降、日本人宿泊客ではなく、東アジアを中心とした外国人宿泊客が集まり始めた。

2005 年には、同地区を中心に大阪府簡易宿所生活衛生同業組合の組合員有志が集まり、阪南大学国際観光学部松村教授のもと、外国人宿泊客の集客を促進するため、大阪国際ゲストハウス地域創出委員会（以降 OIG 委員会）が結成された。結成以降、OIG 委員会では外国人観光客の宿泊集客のために様々な取組を行ってきた。OIG 委員会での取組みとしては、太子 1 丁目地区をモデル地区として外国人観光客の受け入れにより経験を蓄積しつつ、新今宮 TIC（Tourist

Information Center）の開設と運営、OIG 委員会加入の宿泊施設のパンフレットの作成、各種メディア戦略など多岐に渡った。その活動を着実に成果に繋げ、近年のインバウンドブームにも乗り、2018 年には日本人のビジネス、観光の宿泊客も含めて年間 40 万泊以上の宿泊客が利用する地域となった。また現在では宿泊客の約 6 割が日本人の観光客、ビジネスマンという状況となった。

このような先手を打った簡易宿所の大きな顧客の転換の中で、同地区の商店街である動物園前一番街（正式名：飛田本通商店街）では、2017 年より大阪府の商店街サポーター創出・活動支援事業に応募、その採択を受けて、外国人観光客の取り込みを目的としたイベントが企画されることになった。

2018 年に同取組のイベント「大阪ディープストリート」が行われ、筆者の一人杉浦もそのイベントに出店し協力をしたが、目的とした外国人観光客の集客には結びついていないように思えた。また、商店街やこの事業者による利用客のモニタリング調査も行われなかったため、イベントの有効性について確認はされなかった。

このイベントの行われた同じ時期である 2018 年 10 月に大阪市西成区役所の「西成特区構想」にて「西成特区構想　まちづくりビジョン有識者提言」が作成され、その提言から様々な事業が 2019 年度より行われることとなった。その事業の中には新今宮駅南側エリアを中心とした地域で行われる「地域密着型エリアリノベーションビジネス促進事業」がある。この事業はインバウンドによる活力を使い、当該地域での屋台村等イベント開催や空店舗利用の促進を行うことで地域の活性化を狙うことを目的とし、複数年の事業として実施中である。

1-2　浪速区側の動き

また、太子地区のある新今宮駅周辺地域の開発動向ではインバウンドによる活力を狙う動きが加速しており、ホテル、民泊施設の新築や開業を多数みることが出来る。2019 年 6 月より新今宮駅周辺地域の浪速区恵美須西地区では星野リゾートの宿泊施設「OMO7 大阪新今宮」の建設工事が着工した。同施設は 2022 年 3 月の開業を目指し建設が進んでいる。また同年 9 月には同じ恵美須西地区の、元馬淵生活館（あいりん地域の隣保事業的位置づけだった）の跡地

に、株式会社 YOLOJAPAN が南海電気鉄道株式会社と共に、外国人の就労支援を目的とした施設である「YOLOBASE」を開業した。この施設は、宿泊サービス、飲食サービス、イベント会場運営などのサービス提供を通じて、就労インバウンドトレーニングを実施し、特定技能資格で求められる業務スキルの習得と、知識・語学の習熟、実務経験の増進を図っている。また、日本最大級の登録支援機関を目指して、特定技能資格に基づく外国人就労者の生活全般のサポートも行っている。

浪速区では 2019 年度より同地域を対象とした「新今宮駅北側まちづくりビジョン策定事業」が行われている。その事業趣旨は「来街者が急増している新今宮駅北側エリアにおける観光の視点を踏まえたまちづくりについて、その方向性や将来像について共有し、関係者・事業者による取組推進や、周囲の開発に投資しやすい環境を創出するため、ビジョンを策定する。」(浪速区 HP より)とされている。このような行政の施策も進み始めた同地区においては星野リゾート、YOLOBASE とともに 2017 年に廃校した恵美小学校跡地の利用についても、今後の動向が気になるところである。

また 2031 年度にはうめきたや新大阪へ直通する「なにわ筋線」が、大深度の難波地下駅から、地上そして高架へと南海電気鉄道の新今宮駅で合流する。このような新規交通インフラ整備も併せて、新今宮駅周辺地域でのインバウンド需要を狙った様々な開発は今後も旺盛に推移すると考えられる。

1-3　通行人調査の背景

このように太子地区及びその周辺地域では、宿泊施設の好調な集客状況やインバウンド需要の取り込みを目的としたホテル、民泊施設などの様々な開発案件の増加、またインバウンド需要の取り込みを煽るマスコミなどの世論により、行政を含めた地域の関係者間では、太子地区と商店街の活性化策にはインバウンド需要を取り込むことが不可欠であるという認識が大勢を占めていた。しかし、そうした需要は同時に、この地域でツーリズム主導のジェントリフィケーションを引き起こし、居住空間が減少するという問題も生じている。この点については、本稿の後半で若干の経緯と展望を示したい。

ただインバウンド需要がどれほど地域の中にヒトの流動として影響を与え

ているのかに関しては、まだ調査が手掛けられていなかった。商店街や地域における通行人の属性などの現状分析の必要性のもと、具体的な分析結果をもって商店街や太子地区全般の活性化やインバウンド対応のあり方を知ることは必須であった。おりから中国人不動産業を中心とするカラオケ居酒屋の急増や飛田新地の利用客増加も見られる中、インバウンド需要や日本人の新たな利用者が、どれだけ太子地区と商店街に流入出しているのか、まずは通行人調査を手掛かりに把握することが本稿の目的である。

そこで、動物園前一番街周辺地域を中心に通行人調査を実施し、この商店街の日常的な人の流動の現況を明らかにする。また通行人調査をもとに商店街サポーター創出・活動支援事業と地域密着型エリアリノベーションビジネス促進事業の共同で行われた「新今宮フェスティバル」の効果により通行人にどのような変化が生じたのか分析するほか、複数地点での通行人調査結果を合わせて分析することで、動物園前一番街の通行人の特徴をより詳細に分析し、そこにある課題や特徴などを明らかにすることにした。

２．太子・山王地域のインバウンド観光客の入り込み分析

2-1　大阪市全体との比較

図 1 は、携帯電話の基地局情報をもとに、2017 年 8 月～2018 年 7 月において、指定地域内の 1km メッシュ単位で区切られた各地点の訪日外国人のうち、1 時間以上そのメッシュの範囲に滞在した人数を示したものである。図 1 より、外国人滞在者数は難波、梅田、天王寺といった大阪メトロ御堂筋線に沿いのエリアに加え、京橋駅、鶴橋駅といった JR 大阪環状線の主要乗換駅周辺エリアに多い傾向にあることが分かる。また、その両方に該当する西成区の太子・山王地域のメッシュにおいても、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンや大阪城付近のエリアにおける滞在者数とほぼ同水準の 126.3 万人もの外国人観光客が 1 時間以上そのメッシュ内に滞在しており、外国人観光客の西成区太子・山王地域への注目の高さがうかがえる。

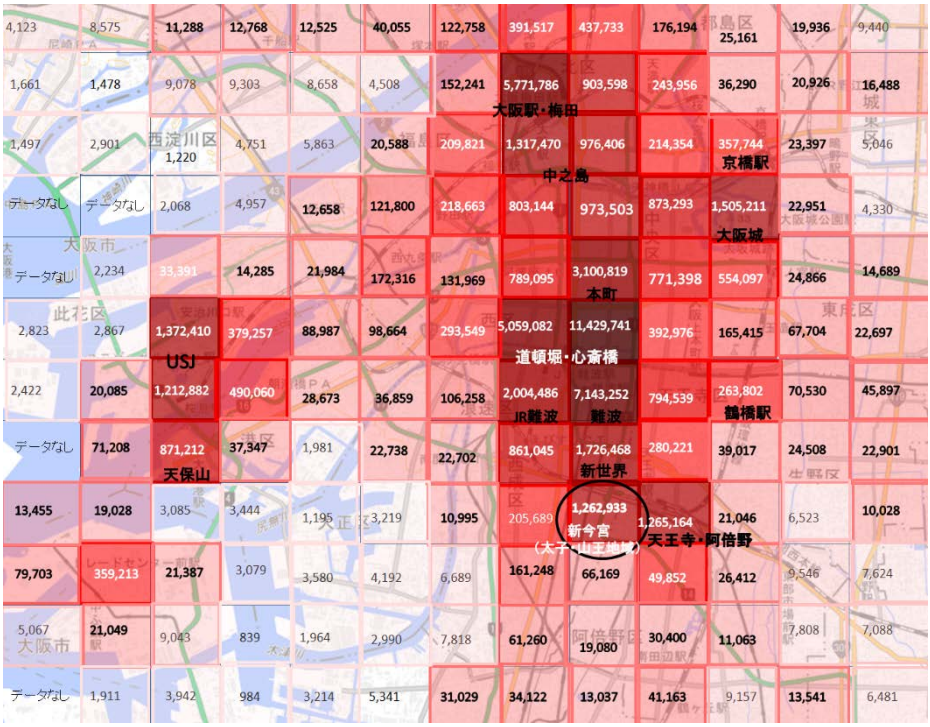

図 1：2017 年 8 月～2018 年 7 月においてそのメッシュ内に 1 時間以上滞在した外国人観光客数

RESAS（モバイル空間統計）のデータをもとに筆者作成

2-2　西成区太子地域の外国人観光客、宿泊客の動態

図 2 は、西成区全体の外国人観光客の夜間滞在人口と太子地域の主要簡易宿所における外国人観光客の宿泊者数の推移を示したものである。この図より、西成区における外国人宿泊者数は 2018 年、2019 年に大きく伸びているのに対し、太子地域における主要簡易宿所における外国人宿泊者数は横ばいの状態となっていることが分かる。割合でみると、2017 年 9 月の時点では西成区における外国人夜間滞在者の約 47%が太子地域の簡易宿所に宿泊していたが、2019 年 3 月頃には 20%程度に低下している（図 3）。

また、図 4 の 2018 年、2019 年の外国人観光客の宿泊者数推移を見ると、2019 年 6 月以降、前年の宿泊者数を下回っていることが分かる。ただし、これは西成区全体における外国人観光客数が減少したのではなく、西成区内にホテルや民泊などの他の宿泊施設が増加したことにより、太子地域に集中していた外国人観光客が西成区内に分散したことが原因だと考えられる。

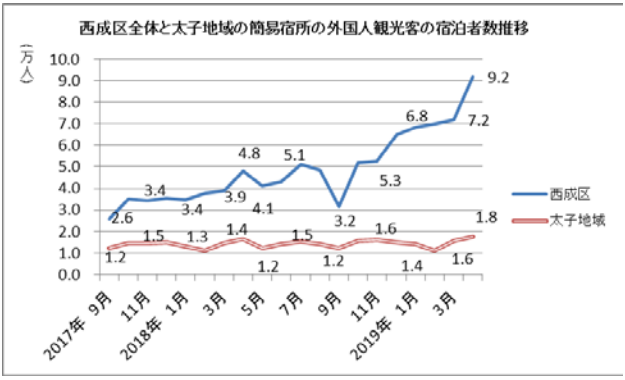

図 2：西成区全体と太子地域の簡易宿所の外国人観光客宿泊者数推移

RESAS（モバイル空間統計）のデータ、簡易宿所組合資料をもとに筆者作成

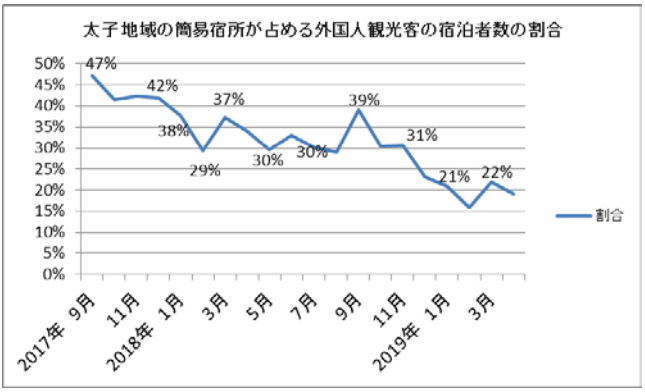

図 3：太子地域の簡易宿所が占める西成区の外国人宿泊者数の割合

RESAS データ、簡易宿所組合資料をもとに筆者作成

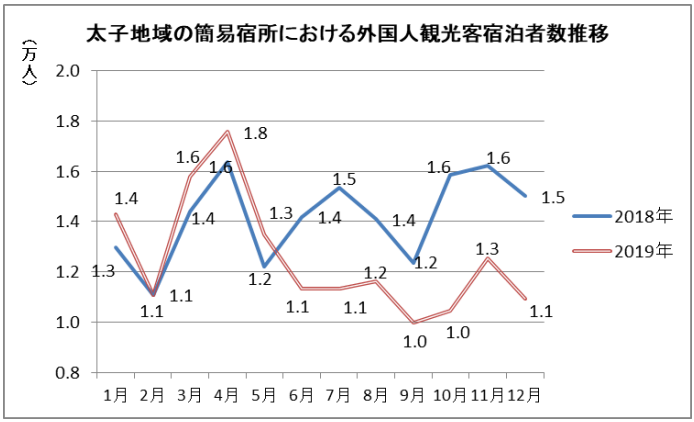

図 4：太子地域の主要簡易宿所における外国人宿泊者数推移

簡易宿所組合資料をもとに筆者作成

2-3　太子・山王地域における商店街通行人調査

以上のようなインバウンド観光客の増加を受けて、太子地域の簡易宿所街に隣接している動物園前一番街は、最もその影響やインパクトを見やすい地点の一つである。 本章 1 節で紹介した通り、様々なプロジェクトを実験的に行なってきた、あるいは現在進行形のエリアでもある。

このインパクトを捉える上でのアプローチとして、商店街の通行人調査を実施することにした。これは大阪府の補助事業でも織り込んでいたものであり、目視という調査方法上の限界はあるものの、そうしたインパクトを裏付ける貴重な資料になりうると考える。

実際、外国人の通行がどの程度あるのか。また、外国人以外にどのような人が通行しているのか。その計測のため、「動物園前 1 番街北側入口」での通行人調査に加え、新今宮駅と簡易宿所街の中間地点であり、かつ大阪メトロ動物園前駅 4 番出口のすぐ近くで、太子地域に宿泊する外国人観光客多く通行する場所である「太子交差点」、1993 年に廃止された南海電鉄天王寺支線跡の動物園前 1 番街の南側の入口付近に作られた「廃線跡公園」の計 3 か所での調査を行い、全地点での通行人の出身国（地域）別（日本人か外国人か）、性別、年齢層について調査を行なった。なお、調査実施日は 2019 年 10 月下旬～1 月初旬

の木曜日～日曜日で、15 時～20 時までのそれぞれに固定した毎時 10 分間通行量の計測を行った。

図 5：調査地点の広域地図

地理院地図をもとに筆者作成

３．動物園前一番街北側入口と太子交差点の比較

土曜日における外国人通行量を、太子交差点と動物園前一番街北側入口の二地点について、外国人の通行量（図 7）と外国人比率（図 8）から整理する。図 7 より、動物園前一番街北側入口における外国人通行量は毎時 10 分で 8 人～27 人と推移しているのに対し、太子交差点は 24 人～62 人と高い値で推移していることが分かる。

また、図 8 の外国人比率の比較をみても、動物園前一番街北側入口における外国人比率は 5.1%～13.2%と推移しているのに対し、太子交差点における外国人比率は 9.9%～28.0%と高い値で推移しており、どの時間帯においても、後者

の比率が 2 倍以上になるという結果が得られた。つまり、西成区の新今宮エリアに多くの外国人観光客が訪問しているのは確かだが、実際動物園前一番街を通行している外国人観光客数が多いわけではないという、商店街方面への外国人入り込み実態が異なることを量的視点から具体的に明らかにできた。

図 6：調査地点周辺地図

地理院地図をもとに筆者作成

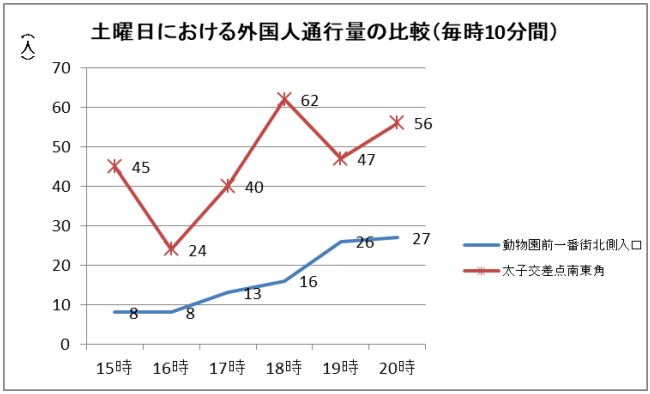

図 7：太子交差点と動物園前一番街北側入口の外国人通行量比較

通行人調査をもとに筆者作成

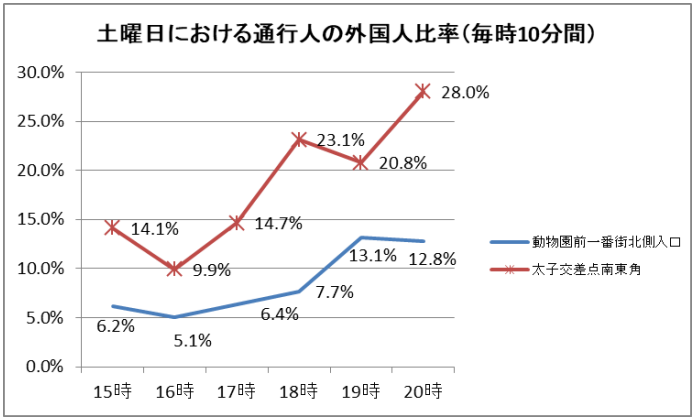

図 8：太子交差点と動物園前一番街北側入口の外国人比率の比較

通行人調査をもとに筆者作成

4. 動物園前一番街における通行人調査

4-1　男女別比較

図 9 は日本人男女の毎時 10 分間の通行量の合計を曜日ごとに比較したものであり、表 1・表 2 は木曜を基準にとした各曜日の通行量の増加率を示している。図 9・表 1・表 2 より、男女間での増加率を比較すると男性の増加率の方が高い傾向にあることが分かる。特に土曜日の男性は約 1.7 倍で、女性の約 1.3 倍と比較してその伸び率は大きい。この特徴は、動物園前一番街の商店街の性質に由来しており、動物園前一番街を含む飛田本通商店街振興組合は、カラオケ居酒屋や飛田新地など男性をターゲットにした店舗が多くを占めるため、土曜日や日曜日の男性通行量の増加につながったと考えられる。また、そのような店舗には夕方以降の訪問が主流であるため、休日前の土曜日の通行量が最も多いのではないかと推測される。

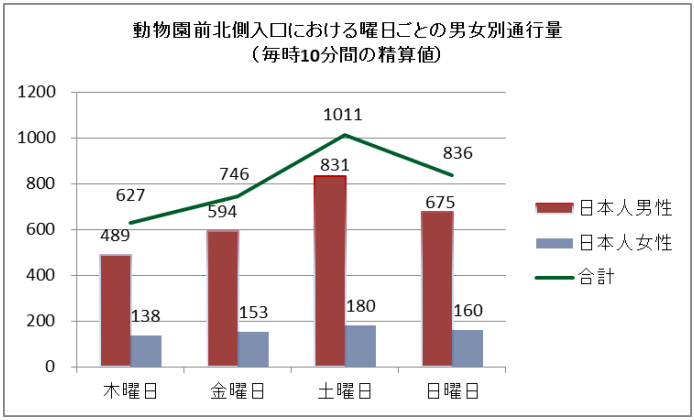

図 9：動物園前北側入口における男女別通行人量推移

通行人調査をもとに筆者が作成

表 1：動物園前一番街北側入口における木曜日を基準とした男性増加率

男性増加率（木曜日と比較）	
金曜日	21.4%増
土曜日	69.9%増
日曜日	38.1%増

通行人調査をもとに筆者作成

表 2：動物園前一番街北側入口における木曜日を基準とした女性増加率

女性増加率（木曜日と比較）	
金曜日	10.9%増
土曜日	31.2%増
日曜日	16.6%増

通行人調査をもとに筆者作成

4-2　男性の年代ごとの時間別通行量推移

図 10～図 13 は、それぞれ木曜日～日曜日における年齢別の男性通行量を示したものである。これらのグラフから言える大きな特徴は、おおよそいずれの曜日においても時間帯が遅くなるほど 20 代～30 代の男性通行量が多くなる傾

向があることである。土曜日・日曜日ともに 19 時以降には 20 代～30 代の男性の通行量が 60 代以上の男性の約 2～3 倍確認された。

その要因として、カラオケ居酒屋や飛田新地といった若い男性をターゲットにした店舗が動物園前一番街内やその周辺地域に立地、また増加しており、それらによる集客効果が大きいことが挙げられる。高齢化率が 40%を超える西成区においてこのような若い男性が多く訪問していることは、近年見られる新たな動きとして特筆されよう。

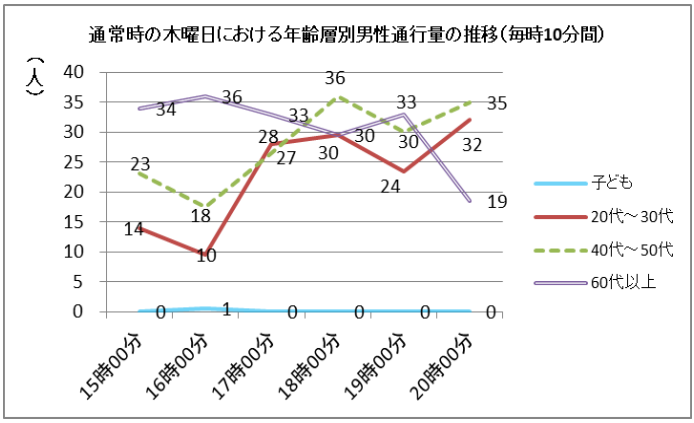

図 10：通常の木曜日の年齢別男性通行量

通行人調査をもとに筆者作成

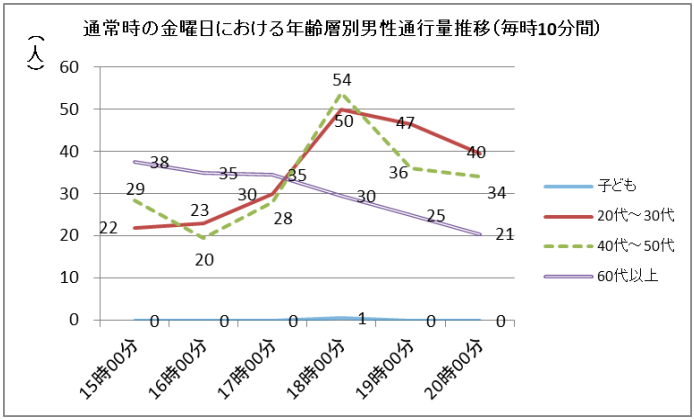

図 11：通常の金曜日における年齢別男性通行量

通行人調査をもとに筆者作成

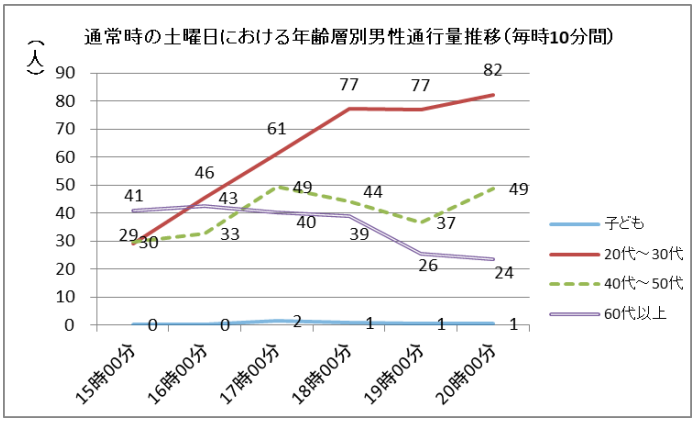

図 12：通常時の土曜日の年齢層別男性通行量推移

通行人調査をもとに筆者作成

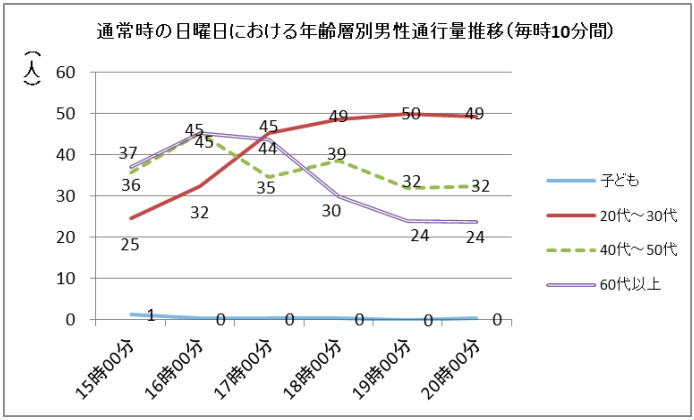

図 13：通常時の日曜日の年齢層別男性通行量推移

通行人調査をもとに筆者作成

4-3　各曜日の国籍別通行量の比較

図 14 は、動物園前一番街北側入口における各曜日の日本人／外国人通行量の合計値を、表 3 は全通行人のうち外国人が占める割合を示したものである。外国人通行量が最も多いのは土曜日の 100 人で、最も少ないのは木曜日の 50 人という結果になった。また、全通行人の内、外国人が占める割合が最も高いのは金曜日の 9.5%で、最も低いのは木曜日の 7.4%であった。

さらに、図 15 は動物園前一番街北側入口における国籍別通行量の増加率を示したものだが、外国人の通行量は日本人通行量と同様に、平日の木曜日よりも土曜日に多くなる傾向があることが分かる。

表 3：動物園前一番街北側入口における各曜日の外国人比率

各曜日の外国人比率	
木曜日	7.4%
金曜日	9.5%
土曜日	9.0%
日曜日	8.3%

通行人調査をもとに筆者作成

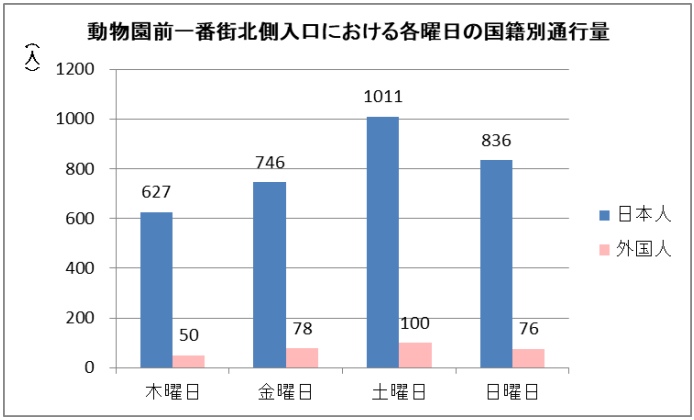

図 14：動物園前一番街北側入口における各曜日の国籍別通行量

通行人調査をもとに筆者作成

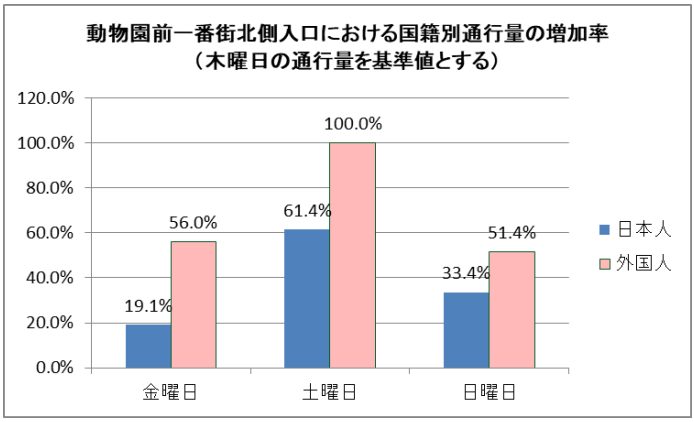

図 15：動物園前一番街北側入口における国籍別通行量の増加率（木曜日を基準値）

通行人調査をもとに筆者作成

5. 「新今宮フェスティバル」のイベント効果の検証

本章 1 節で紹介した地域活性化を目的としたインバウンド向けの事業の一

つに、2019 年 10 月 30 日（水）～11 月 4 日（月）にかけて新今宮駅南側のエリアにおいて開催された「新今宮フェスティバル」が挙げられる。そこで、本イベント開催期間において実施した通行人調査の結果と、それ以外のイベント開催のない日の通行人調査の結果を比較することにより、本イベントにより通行人にどのような変化が起きたのか分析する。

5-1　動物園前一番街北側入口における調査

図 16 は通常時とイベント開催期間の日本人通行量を、図 17 は外国人の通行量を曜日別に比較したものである。また表 4、5 はそれぞれ日本人と外国人の通行量、およびその伸び率についてまとめたものである。

図 16、図 17 を曜日ごとに見ると、木曜日は日本人の通行量も伸びてはいるが、それ以上に外国人の通行量の伸びが著しく、金曜日は日本人・外国人ともに伸びがあまりないか、もしくは減少していることが分かる。また、土曜日・日曜日には国籍問わず通行量の増加が著しいという特徴がある。

つまり、金曜日を除き、イベント開催期間には国籍問わず全体的な通行量の増加が見られたということが分かる。ただ、このイベント開催期間にはハロウィンや日曜日の翌日月曜日が祝日であったこともあり、それが通行量の増加につながった可能性があることもここに記しておく。

これらの結果から、イベントの集客効果のみが動物園前一番街北側入口における通行量の増加に寄与したかは断定できないが、結果として多くの人々がこのイベントに触れる機会があり、この太子地域のイメージアップにつながった部分があると考える。

表 4:廃線跡公園における通常時とイベント開催期間の日本人通行量とその伸び率

曜日	通常時	イベント開催期間	伸び率
木曜日	454 人	546 人	20.4%
金曜日	530 人	549 人	3.6%
土曜日	740 人	952 人	28.7%
日曜日	551 人	845 人	53.5%

通行人調査をもとに筆者作成

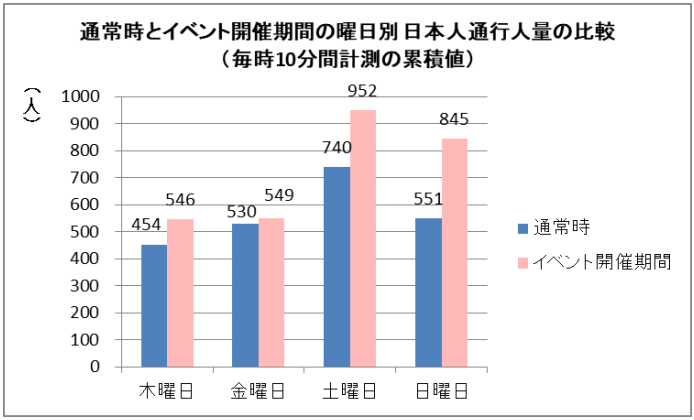

図 16:廃線跡公園における通常時とイベント開催期間の曜日別日本人通行量の比較

通行人調査をもとに筆者

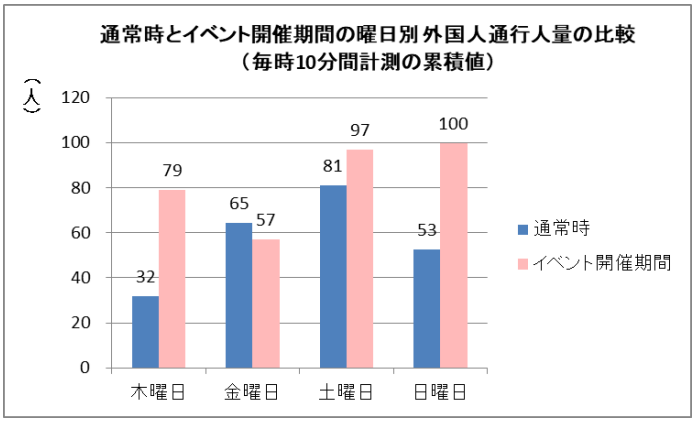

図 17：通常時とイベント開催期間の曜日別外国人通行量の比較

通行人調査をもとに筆者作成

表 5：通常時とイベント開催期間の外国人通行量とその伸び率

曜	通常時	イベント開催期間	伸び率
木曜日	32 人	79 人	146.9%
金曜日	65 人	57 人	-11.6%
土曜日	81 人	97 人	19.8%
日曜日	53 人	100 人	89.9%

通行人調査をもとに筆者作成

5-2　廃線跡公園における調査

図 16 は、廃線跡公園における通常時とイベント開催期間の日本人の通行量を、図 17 は外国人の通行量を曜日ごとに比較したものである。また表 6 は、日本人の通行量とイベント時の通行量の伸び率を、表 7 は外国人の通行量とその伸び率を示したものである。

まず日本人通行量に注目すると、日曜日を除く全ての曜日で通行量がイベント開催期間よりも少ないことがわかる。これは、金曜日～土曜日において廃線跡公園付近での日本人向けのイベントの開催が少なかったことに起因すると考えられる。しかし、それに対して日曜日には通常時よりも 180 人ほど多い通行量あり、これにはイベント開催による若干の集客効果と、翌日の月曜日が祝日であったことが影響していると考えられる。

次に、図 19 および表 7 の外国人通行量に注目すると、金曜日にわずかに減少しているものの、基本的にはイベント開催期間の方が増加傾向にあることが分かる。これは、街歩きイベントなどの開催により、普段、廃線跡公園の方まで足を運ばない外国人観光客および外国人留学生などが来訪したことに起因すると推測される。

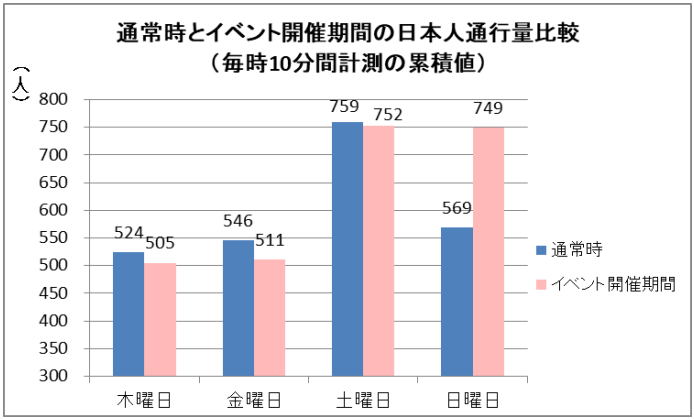

図 18：廃線跡公園における通常時とイベント開催期間の日本人通行量比較

通行人調査をもとに筆者

表 6：廃線跡公園における通常時とイベント開催期間の日本人通行量と伸び率

曜日	通常時	イベント開催期間	伸び率
木曜日	524 人	505 人	-3.6%
金曜日	546 人	511 人	-6.3%
土曜日	759 人	752 人	-0.9%
日曜日	569 人	749 人	31.6%

通行人調査をもとに筆者作成

表 7：廃線跡公園における通常時とイベント開催期間の外国人通行量、およびその伸び率

曜日	通常時	イベント開催期間	伸び率
木曜日	37 人	35 人	-4.1%
金曜日	46 人	74 人	60.9%
土曜日	60 人	66 人	10.0%
日曜日	54 人	69 人	28.6%

通行人調査をもとに筆者作成

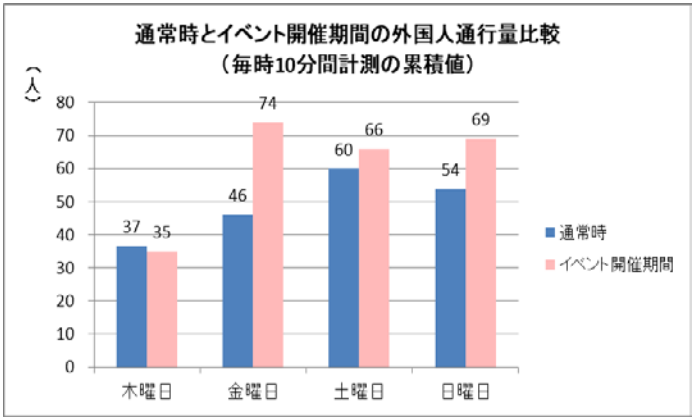

図 19：廃線跡公園における通常時とイベント開催期間の外国人通行量比較

通行人調査をもとに筆者

以上の結果より、廃線跡公園においてはイベント開催により日本人の通行量に（日曜日を除き）大きな変化はなかったものの、外国人の通行量は平均すると約 1.2 倍の増加率があり、その点からすると、イベントによる集客効果はあったのではないかと考えられる。また、11 月 3 日（日）と 4 日（月）には、廃線跡公園付近において街歩きや忍者体験、ちんどん通信社による演奏など、普段はできない体験が可能となっていたため、ある一定数の外国人観光客がこのイベントに参加していた。だが、太子交差点における外国人の通行量の多さを考えると、もう少し地域の中に入って回遊しつつ、コンタクトを増やすことが求められるだろう。

6. 調査のまとめと課題について

太子地区では外国人観光客の増加及び、日本人観光客の増加により確実に地域に変化が生じている。行政と民間が一体となったイベントや店舗では様々な国や地域からの参加者や来店者が見られ、動物園前一番街北側入口におけるイベント期間（10 月 31 日～11 月 4 日）の通行人調査では、平均で通常の約 1.3 倍程度の通行量が確認された。また、廃線跡公園における通行人調査でも、日

本人通行量の伸びはあまりなかったものの、外国人通行量は通常の 1.2 倍以上の通行量が見られ、普段商店街を歩かない外国人が街歩きなどの企画を通して、商店街を観光するきっかけになったと考えられる。

また、イベント開催のない通常時の動物園前一番街北側入口における通行人調査では、全通行人の内約 10%が外国人であるという状況に加え、2015 時点で高齢化率が 40%近い西成区において、20 代～30 代の若年層の男性の通行量が、土曜日・日曜日の夕方以降について 60 歳以上の高齢者のそれを大きく上回っていたことが確認された。特に土曜日の 19 時・20 時には、男性通行人の 50%以上が 20 代～30 代の男性で占められているという結果が得られた。

こうした若年層は、今までになかった新たな来訪者であり、見方によっては、若い人が商店街にやってくるという大きな変化といえる。元来この商店街は飛田新地の開業を契機に出来たという経緯があり、飛田新地への客目当てに繁栄した門前町的な商店街である。ある意味ではその本来の客の流れが蘇ったという印象である。また、太子地区をはじめとした飛田新地近隣地域でのインバウンド観光客の増加や、SNS や You Tube などのネットにより、飛田周辺地域の現状の情報が世間で拡散され、「危ない」といった地域イメージが薄れ、来訪への敷居が下がるなどして、実質的に飛田新地が観光地化されたことも大きく影響していると思われる。

だが一方で今後の課題も明らかになった。外国人観光客をターゲットにしたイベントや店舗ある一方、太子交差点南東角における調査で計測された外国人通行量と比較すると、かれらの参加数や来店数がそれほど多くなく、動物園前一番街北口や廃線跡公園での外国人通行量は、新今宮駅や動物園前駅と直結する太子交差点の外国人通行量の 50%以下というのが現状である。入口での入込客の半数ほどになるということは、その手前で宿泊施設に吸収され、より地域の内部にまで入り込む外国人は少ないと推測される。

この現状を踏まえて考察すると、外国人観光客のみをメインターゲットとした取組、すなわち商店街サポーター創出・活動支援事業および地域密着型エリアリノベーションビジネス促進事業などは、ターゲット層の設定の面で問題を抱えていた。すなわち、そこでは若い日本人観光客がターゲットに含まれていなかったのである。

地域の活性化取組の提案としては、観光客誘致に積極的な地域の商店主や宿泊施設の事業者の有志を集め、今回の通行者調査分析データの報告を行い、事業者間で共有し、新たなコミュニティをつくり、地域の活性化に対する連帯感を強化することが肝要であろう。

また、地域の顧客となる太子地域に宿泊している外国人及び日本人の観光客が本当に望んでいるイベントや店舗などのサービスについて、宿泊している観光客よりヒアリング調査やアンケート調査を行い、そのイベントやサービスを新たなコミュニティにより企画検討、作成、実施する。そしてそれらを来訪する観光客へプロモーションし、提供・開催していくことが、観光客の活力を生かしたまちの再生につながる一番の近道ではないだろうか。

7. 簡易宿所とともにはぐくんできた地域の包容力

商店街から、太子地区に展開する簡易宿所に再び舞い戻り、近年の地域の変容について、今までの簡易宿所の経営の特質から最後に振り返っておこう。太子地区の簡易宿所事業者自身が顧客を日雇い労働者から旅行客用の宿泊施設に変化出来た要因の一つとして、地区別による宿泊価格の違いがあったと思われる。簡易宿所街は萩之茶屋、太子地区一帯と捉えられているが、簡易宿所街の東に位置する太子地区は、元来日雇い労働者でも鳶工や鉄筋工などの職能工が多く宿泊しており、宿泊価格も萩之茶屋に比べ比較的高い地区であったといわれる。そのため、地区での収益性が相対的に高く、事業者自身の経営基盤を整え、施設のリノベーションや新たなフロントスタッフの雇用などの投資を行うことができ、経営の変化に対応できたものと思われる。

また、太子地域の簡易宿所事業者は簡易宿所だけではなく、生活保護用の共同住宅も所有しているケースが多く見受けられる。そのため、従来の日雇い労働者で年金生活者や生活保護受給者になった顧客を、自身の経営する共同住宅（簡易宿所から転換した物件も多い）へ転居を促す事例も多くあるとされる。簡易宿所事業者にとっては、自身の簡易宿所を旅行者対応に変化させる一方で、今までの顧客の転居先をフォローすることで長年簡易宿所を愛用した顧客を大事にする姿勢も取っている。これは、現在の時勢の変化に対応出来たのが、

長年利用してきた従来の顧客のお蔭であることを、簡易宿所事業者が忘れていない証左だといえる。

表８：太子１、2 丁目の近年の高齢者人口推移

住民基本台帳		65 歳以上	65-74 歳	75 歳以上
2019 年	太子 1 丁目	760	402	358
9 月末日	太子 2 丁目	319	154	165
合計		1､079	556	523
2014 年	太子 1 丁目	846	512	334
9 月末日	太子 2 丁目	334	192	142
合計		1､180	704	476
2011 年	太子 1 丁目	834	534	300
9 月末日	太子 2 丁目	344	202	142
合計		1､178	736	442

注：2011 年は外国人を含んでいない。2014 年 9 月末日で当該年齢層の外国人は、両丁合わせて 30(23+7)人となっている。

昨年、2018 度の本ブックレット 17 号において、水内（2019）は太子地域の人口減少は、滞在人口の増加により相殺されていることを指摘していた。確かに、1995 年から 2015 年の国勢調査において、太子 1 丁目の人口は、3,358 人から 2,006 人に減り、2019 年 9 月末日の住民基本台帳では、1,431 人まで減少している。高齢者の人口を見ると、表 8 のように、それほどの減少は近年見られていない。2019 年において、65~75 歳人口の減少が見られ始めているが、加齢層が 75 歳以上に移行したことなど、単身高齢居住者の新規流入は少ないと思われる中、高齢者の居住に関しては、安定した状況を保っていることももうひとつの特徴である。

居住から民泊や、簡易宿所のいわゆる観光やビジネスの宿泊者への転換において、居住者のスムーズな転居があり、ほぼ近隣に居住を継続できているというのが実態であろう。簡易宿所の経営者も、福祉アパート化も同時に進めている中、そうした層への配慮を当然のこととしているのは、上述した通りである。その意味で、ジェントリフィケーションは高齢者の居住面では生じていないと

思われ、より事態を正確に反映した表現を採るならば、最近の変化と共存しているといえるのではないか。

ただし、同じく前年ブックレット 17 号の王（2019）や陸（2019）が示すように、中国人不動産業者による商店街のカラオケ居酒屋化といった変化が、従来の地域住民の近隣で進んでおりこれまでにないタイプの居住者の増加もみられる。 このように、さまざまなステークホルダーが介在し、結果として変容に臨機に対応する、懐深い包容力のある地域として存在してきた。多様な意味での吸引力を持っている魅力をアドバンテージとして活かしたまちづくりを、今後とも期待したい。

謝辞

通行人調査においてご協力くださった動物園前一番街理事長の村井康夫様、動物園前二番街会長の足立眞美様、旧ワシントン店主の中澤春枝様、商店街活性化サポーター創出・活動支援事業に関する情報をご提供くださったことなび株式会社の足立尚樹様、有限会社アークデザインの上村俊文様、吉村将治様、本当にありがとうございました。最後になりましたが、本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた、山田純範簡易宿所組合理事長はじめ、簡易宿所組合の皆様、および地域自治会の皆様、調査対象者の皆様に心から感謝します。本当にありがとうございました。

付記

なお本論文は、2019 年度 大阪市立大学 文学部 地理学教室に提出した論文「インバウンド観光を生かした地域活性化事業と通行人調査分析 ―大阪市西成区太子・山王地域を事例に―」の一部加筆修正した部分が第 2 節、3 節、4 節、5 節であり、第 1 節、6 節、7 節は杉浦が執筆した。また、本論文内で紹介した大阪府・大阪市の事業について、2019 年度大阪府商店街サポーター創出・活動支援事業は、ことなび株式会社と有限会社アークデザインにより受託され、「地域密着型エリアリノベーション事業」は、地域密着型エリアリノベーションビジネス促進事業共同企業体(株式会社インプリージョン、大阪府簡易宿所生活衛生同業組合、有限会社ケース)により受託され、それぞれ活動が行われたことをここに付記する。